

日本音楽学会第68回全国大会 プログラム

大会第1日 10月28日(土) ※開催時間と会場は変更される場合があります。

9:00 受付開始 場所：2号館 (D棟) 玄関ロビー

9:40~9:45	開会の辞 2号館 (D棟) 2階 D4講義室				
	Session A 2号館 (D棟) 1階 D1講義室	Session B 2号館 (D棟) 3階 D2講義室	Session C 2号館 (D棟) 2階 D8講義室	Session D 2号館 (D棟) 3階 D6講義室	Session E 2号館 (D棟) 2階 D4講義室
	司会：村田千尋	司会：西村 理	司会：増田 聡	司会：永原恵三	司会：赤塚健太郎
9:50~10:30	A-1 山口真季子 シェンベルクによるシェンベルク作品分析 ——シェンベルクの所蔵楽譜における書き込みを手掛かりに——	B-1 桃井千津子 旋法性音楽のための新たな分析概念と使用例 ——ドビュッシーの《前奏曲第1集》〈雪の上の足跡〉を対象として——	C-1 武田康孝 戦前～戦中期の洋楽放送における「軽音楽」概念の変遷	D-1 河内春香 江口隆哉の作品創作における舞踊音楽	E-1 大高誠二 いかにして拍子は meter になったのか
10:35~11:15	A-2 加藤幸一 無言歌の連作楽曲集 ——シェンベルクの《即興曲集》D. 899の検証——	B-2 釘宮貴子 1910年代～1930年代のドイツ・オーストリアにおける日本詩と声楽曲 ——ハンス・ペトゲ『日本の春』(1911)による声楽曲——	C-2 齋藤 桂 サイレン音のサウンドスケープ ——1920～30年代の日本を例に——	D-2 徳永 崇 柴田南雄のシアター・ピースにおけるハイブリッド性の特徴	パネル1 2号館 (D棟) 2階 D4講義室 21世紀のテレマン像 ——没後250年を記念して——
11:20~12:00	A-3 三島 理 ブラームスの作品118及び作品119を構成する小曲の配列順位の探究 ——カノン群の音理的配列原理の調査から——	B-3 佐野旭司 創造的音楽家協会 ——世紀転換期ウィーンの音楽界の一断面——	C-3 今野哲也 〈クリムゾンキングの宮殿〉に見られる「半減7の和音」の効果 ——「反復クリシェ」の技法の観点から——	D-3 尾崎一成 林光の宮沢賢治オペラにおけるプレヒト演劇的なもの	コーディネーター兼パネリスト： 佐藤康太 パネリスト： 加藤祐未 七條めぐみ 菅沼起一
12:05~12:45	A-4 石原勇太郎 アントン・ブルックナーの《交響曲第6番》における調計画 ——同時進行する調の流れの視点から——	B-4 阿久津三香子 アーノルト・シェンベルク オペラ《モーセとアロン》 ——構想の変遷と民の属性の明確化——	C-4 畑 陽子 変容するレグトン ——米国音楽市場とラテイノ——	D-4 原 壘 武満徹のピアノ独奏曲《フォー・アウェイ》再考 ——セブンス・コードの使用を中心に——	
12:45~13:45	昼休み				
	Session F 2号館 (D棟) 1階 D1講義室	Session G 2号館 (D棟) 3階 D2講義室	Session H 2号館 (D棟) 2階 D8講義室	Session I 2号館 (D棟) 3階 D6講義室	Session J 2号館 (D棟) 2階 D4講義室
	司会：吉川 文	司会：千葉 潤	司会：田崎直美	司会：今田健太郎	司会：松田 聡
13:45~14:25	F-1 牧野 環 トマス・タリスの典礼用ラテン語声楽曲全曲の定旋律技法	G-1 神竹喜重子 19世紀末から20世紀初期のロシアにおける芸術メセナ ——古儀式派の資本家と私立歌劇場——	H-1 本間千尋 歌の会「カヴォー・モデルヌ」における既知の旋律を用いたシャンソン創作	I-1 武石みどり 大正～昭和初期の楽士たち ——汽船、活動写真館から交響楽団へ——	J-1 三島 郁 19世紀のハーモニー理論におけるゲネラルバスの意義
14:30~15:10	F-2 近松博郎 J. バッハの声楽マニフィカト ——その対位法的書法についての比較研究——	G-2 山本明尚 プロコフィエフの初期創作の多面性とその成因	H-2 上田泰史 19世紀初期のフランス・ピアノ音楽におけるスイスのイメージ表象とペダルの用法 (1804~1823) ——バリ音楽院ピアノ科教授 L. アダンと J. ヴィメルマンの作品におけるランズ・デ・ヴァーシュを中心に——	I-2 柴田康太郎 1920年代の日本における琵琶映画と小唄映画の興行	パネル2 2号館 (D棟) 2階 D4講義室 作曲家の自筆資料は私たちに何を語るか ——着想から「作品」へ—— コーディネーター兼パネリスト： 池原 舞
15:15~15:55	F-3 松橋輝子 ゼレンカのミサ曲におけるテキストと楽章構成、楽器編成、および作曲法の関係	G-3 菊間史織 スターリン時代の《シンデレラ》における「奇跡的な庭」 ——プロコフィエフのバレエを中心に——	H-3 森 佳子 バリのロッシーニ ——「翻案オペラ」からグラント・オペラへ——	I-3 白井史人 山田耕筰と映画の音楽 ——「戦国群盗伝」(1937)と『川中島合戦』(1941)の分析から——	パネリスト： 浅井佑太 奥村京子 東川 愛
16:00~16:40	F-4 村田圭代 J. S. バッハのライブツィヒ初頭時代までのカンタータにみられる対位法的書法の発展	G-4 木本麻希子 S. プロコフィエフの音の暗号化と芸術的理念 ——《ピアノ・ソナタ》におけるコード略号の音型分析——	H-4 七條めぐみ 『ガゼット・ダムステルダム』紙が映し出す近世ヨーロッパの音楽文化 ——1695年～1720年の音楽関連広告の調査から——	I-4 藤野純也 1930年代の日本における「機械音楽」としての初期電鳴楽器受容 ——特許文献と雑誌記事の分析に基づいて——	コメンテーター： 沼野雄司
17:00~18:30	総会 共通講義棟 (F棟) 2階 大講義室2				
19:00~21:00	情報交換会 大学会館 食堂				

大会第2日 10月29日(日)

※大会の1日目と受付場所、研究発表会場が異なりますので、ご注意ください。また、開催時間と会場は変更される場合があります。

9:00 受付開始 場所：1号館(C棟) 正面玄関ロビー

	Session K 1号館(C棟)1階 C3講義室	Session L 1号館(C棟)2階 C6講義室	Session M 1号館(B棟)2階 B2講義室	Session N 1号館(A棟)2階 A1講義室	Session O 1号館(C棟)2階 大講義室1
	司会：武内恵美子	司会：大田美佐子	司会：宮崎晴代	司会：栗原詩子	司会：仲万美子
9:20~10:00	K-1 加藤いつみ 一節切尺八の奏法に関する考察	L-1 奥坊由起子 エドワード・エルガーをめぐる「イングランドらしさ」の強化と創出——兩大戦間期の音楽論を中心に——	M-1 吉川 文 中世の音楽理論書における音名表記と音組織——オクターヴ枠とテトラコルド構造の関係——	N-1 中村 仁 「実用音楽」から「ハルモニア」へ——ヒンデミットにおけるハンス・カイザーの影響——	O-1 井上登喜子 新レパートリー創出と指揮者——日・独・米の比較実証分析——
10:05~10:45	K-2 鳥谷部輝彦 『東臯琴譜』伝本の分類試論	L-2 和田ちはる ハンス・アイスラーのヘルダーリンへの作曲——「音楽における愚かさ」の観点から——	M-2 菅沼起一 16世紀後期の管楽奏者における装飾技法とヴィルトゥオジティ——ルイージ・ゼノビとジローラモ・ダッラ・カーザの資料を中心に——	N-2 小川将也 グイド・アドラーの様式論再考——様式概念の分析と背景の考察——	パネル3 1号館(C棟)2階 大講義室1 日本の洋楽受容史におけるアメリカ——ヴォーリス建築の駒井家住宅(京都)をめぐる音楽空間から——
10:50~11:30	K-3 栗山新也 三線の製作・流通・社会的価値付けの諸特徴——明治期から昭和期までを対象に——	L-3 牧野広樹 青年音楽運動における音楽実践の位置づけ——楽師ギルドを中心に——	M-3 中島康光 J.S.バッハ《フーガの技法》における作曲手法解釈の試み	N-3 田邊健太郎 GTTMは分析者の何をどのように記述したのだろうか——内観主義と知覚主義の対立について——	コーディネーター： 齊藤紀子 パネリスト： 上野正章 山形政昭 津上智実
11:35~12:15	K-4 福田千絵 戦前の三曲演奏会で用いられた新楽器をめぐる	L-4 成田麗奈 普仏戦争以降フランスで刊行された音楽史書におけるフランス音楽優位の記述——「現代」の記述に焦点を当てて——	M-4 薬形亜樹子 J.S.バッハ《平均律クラヴィア曲集第1巻》におけるテンポ設定への提言——tempo ordinarioの観点からの一考察——	N-4 井手佑圭子 ドイツの音楽プログラム「Jedem Kind ein Instrument」を対象としたアンサンブルにおける相互行為と音楽の変容過程の調査	

12:15~13:00 昼休み

13:00~14:00 大会特別企画 野村誠氏 トーク&映像、パフォーマンス「コミュニティ・ミュージックと作曲家の関わり」1号館(C棟)2階 大講義室1

	Session P 1号館(C棟)1階 C3講義室	Session Q 1号館(C棟)2階 C6講義室	Session R 1号館(B棟)2階 B2講義室	Session S 1号館(A棟)2階 A1講義室	Session T 1号館(C棟)2階 大講義室1
	司会：仲万美子	司会：福田 弥	司会：松田 聡	司会：清水慶彦	司会：荒川恵子
14:15~14:55	P-1 井上さつき 米国領事報告から見る近代日本のピアノ製造	Q-1 野原泰子 ペルリオーズと同時代のロシアの音楽家たち——その交流と創作上の繋がりをめぐる考察——	R-1 西川尚生 1780年代前半のザルツブルクにおけるモーツァルト受容	S-1 信時裕子 大正~昭和前期 五線紙による作曲年代判定の可能性——信時潔文庫整理を終えて——	T-1 松村洋一郎 西洋クラシック音楽の作曲家人名情報の移入と定着に関する調査と分析
15:00~15:40	P-2 高久 暁 エタ・ハリヒビシュナイダーの日本滞在期(1941~1949)の演奏活動をめぐって	Q-2 一柳富美子 知られざるチャイコフスキ——日記の未紹介ページから——	R-2 福地勝美 モーツァルトのカンタータ《悔悟するダヴィデ KV469》の19世紀における受容をめぐって、序説——《復活祭カンタータ》その他の「改作」を通して——	S-2 太田 郁 歌劇《黒船》(序景)(1929)の研究——1930年代の演奏を中心に——	パネル4 1号館(C棟)2階 大講義室1 いま、著作権問題を考える コーディネーター： 渡辺 裕
15:45~16:25	P-3 井口淳子 A. ストロークと原善一郎——日本の音楽マネジメント史を「外地」との関係から読み解く——	Q-3 内藤真帆 グスタフ・マーラー〈第2交響曲〉の管弦楽法——自作品の改訂作業ならびに指揮活動との関連から——	R-3 越懸澤麻衣 劇場から私邸へ——ベートーヴェンの変奏曲に関する一考察——	S-3 鈴木亜矢子 別宮貞雄と團伊玖磨の日本歌曲——山田耕作的アクセント理論を起点とした分析的的研究——	パネリスト： 小岩信治 長塚真琴 増田 聡
16:30~17:10	P-4 杉山恵梨 戦後日本における西洋音楽運動の受容——新聞・雑誌にみられる言説をめぐって——	Q-4 伊藤 綾 マックス・レーガー歌曲の統辞論的研究——ふたつの《Friede》op.79c4とop.76-25の比較分析を通して——	R-4 丸山瑤子 ベートーヴェンの「個人」様式に対する一試論——アントン・イーベルとの比較分析を例に——	S-4 鈴木聖子 小沢昭一と節談説教——1970年代における声の文化の復権活動——	
17:15~17:20	閉会の挨拶 1号館(C棟)2階 大講義室1				